

書評・紹介

西村実則著

『アビダルマ教学 俱舍論の煩惱論』

吉元 信行

この度、大正大学助教授西村実則氏によって、アビダルマ仏教の心理論・煩惱論に関する標記の大著が上梓された。評者の記憶によると、西村氏は、学界に登場以来、ただひたすら、アビダルマ仏教における心理論・煩惱論の研究を発表してこられた。巻末の「初出一覧」からもわかるように、本書はそれらの研究論文の体系的集大成である。ということは、著者のこれまでの研究発表は、すべてこの研究体系を意識しての上でなされたことになり、あらためて、これまでの地道な著者の研究発表に敬意を表するものである。

著者と専門も近いことから、評者には学会での著者の研究発表に接し、また成果の発表の度に、その抜刷をいただき、その都度若干のコメントの返信もした覚えがある。評者がデータベースを作成し始めてから、すでに二〇編もの著者の論文が登

録されており、そのほとんどが本書に増補修正されて採用されている。このように、ずいぶん以前から学問的親交を深めさせていただいた評者として、本書の出版を心からお祝い申しあげること次第である。

著者は、大正大学において、勝又俊教授に師事し、佐藤密雄先生らの指導を受け、専らアビダルマの研鑽をした。同大学院修了後は、三康文化研究所の研究員として、ひたすらアビダルマの研究をなされ、その後大正大学において教鞭をとられることになった。三康文化研究所では、学界でも定評のある「三康文化研究所報」が出版されており、著者はその所報に相当数の論文を発表してこられた。本書の大半はこの所報に報告されたものである。

評者の記憶では、本書には言及されていないが、著者は確か数年前、ドイツ方面に長期の海外研修に行かれたと思う。それ以降、著者の関心はアビダルマ以外のインド仏教教団やインド古典語、さらにはインド文化の分野にも広がっていった。

たとえば、「サンスクリットと部派仏教教団」「ガンダーラ語仏教圏と漢訳仏典」「大衆部・説出世部の僧院生活」「四分律・コータン・仏陀耶舎」「言語」に対するブツダの態度——地方語・チャンダス・歌詠——「説法師——部派と大乘との対比」などである。また、釈尊生譚伝説に関わる一連の研究も注目される（「仏伝における白象入胎について」「マヤー夫人の死とブツダ」）。さらに、「称讚浄土仏撰受経」訳注、「称讚浄土仏撰受経」にみる「蔑辰車」(Hechcha)など、「阿弥

陀經』の異訳である浄土經典についての研究もある。

本書におけるようなアビダルマという仏教学の基礎研究をもとにして、今後これらインド文化に関する研究の進展にも期待したいところである。

二

著者は「はしがき」で、「アビダルマとは原始仏教の解釈学をいう」と述べている。部派仏教の時代には、このようなアビダルマ論書が数多く作られた。著者は、この中で、特に日本仏教の上で古来基礎学と見なされた『俱舍論』の心理論と煩惱論を、それ以前の論書と比較検討をしようとする。ここで、『俱舍論』以外の先行論書には、サンスクリット原典がほとんど存在しないが、著者は最近の学界における新発見のアビダルマ論書サンスクリット断片のある場合は、それらの業績を緻密に参照していることも、本書の価値を高めている。

ただ、ここで、アビダルマの論師たちが「Abhidharma」という場合、単なる解釈学にとどまらず、「勝れた法であり、仏説である」という論師たちの気概のあったことは忘れてはならない。

序論 では、我が国において『俱舍論』が古来仏教学の基礎学としての位置を占め、実際に俱舍学という伝統を打ち出してきたことを明らかにしている。ただ、著者も「とりわけ『俱舍論』の著者世親はその思想的立場を有部→経部→大乘と変えたとか、あるいはすでに唯識の立場、つまり大乘の立場から著し

たという見解さえ最近ある」と指摘しながら、「この点は心理概念の体系史の上からは、どうであるかという問題がある」（七頁）と、曖昧な言い方をしている。この点は近年の学界の最大関心事であることでもあり、本編では逐次この問題に言及していることでもあるから、ここで、本書でこの問題にどう取り組むのかという方向性でも示して欲しかった。

それから、本書は『アビダルマ教学』なるテーマを出しながら、何故『俱舍論』の煩惱論のみに問題を絞ったのか、あるいは、この煩惱論がアビダルマ教学という大きな問題を明らかにする上において、どのような位置づけになるのかも「序論」のところではつきりしておくべきであつたらう。

「五位七十五法」における心・心所法（第一章）著者はまずアビダルマにおける諸法の分類の基本である「色・心・心所・心不相応行・無為」の「五位」の成立について論究する。従来諸説を参考にしながら、原始仏教における蘊・処・界に有為・無為、有漏・無漏という一切法の考え方を有部独自の立場から融合したとする。また、「五位」の原語について、「pañca-dharmaḥ」または、「pañca-vasuṭa」のどちらかであろうとしている。そして、『俱舍論』が三科と五位説を位置づける際に、『甘露味論』『阿毘曇心論』系の三綱要書の影響が大であることを明らかにする。ここで著者は、二十二根説が影響を与えたとする水野説（評者も同じ立場をとる）を否定しているが、評者には少なくとも、心不相応行が五位に採用されたのは、二十二根中の命根の影響があるという点は捨てがたい。

有部アビダルマでは、「心」を意と識の同義語としていることは周知のことである。ここで著者は、『法蘊足論』と『品類足論』のサンスクリット断片の記述を参照して、有部が五位において精神的主体を著す語に「意・識」と使わずに「心」を用いたとする説には注目したい。

古来、有部では一切法を「七十五法」、唯識では「百法」に分類したことがよく知られている。しかし、実際には『俱舍論』等有部系論書の心所の分類では、厳密には七十五という説は確定せず、これらは中国において唯識の『百法明門論』において百法と規定されていることにヒントを得て、普光が「五位七十五法」特定したのであることを明らかにし、詳細は第三章に譲っている。

おそらく、本書で著者が最も力を入れたのは、**心所の分類**（第二章）であろう。有部では、心所（心理的概念）を、1. 大地法、2. 大善地法、3. 第不善地法、4. 大煩惱地法、5. 小煩惱地法、6. 不定地法の六種に分類し、詳細な説明を与えた。本書では、まず「大地法」の説明とそれに対する批判の紹介をする。大地法とは、人間である限り、いかなる心理状況にあらうと、必ず俱生する十種の心所である。ところで、いかなる心理状況と言っても、修行の最終段階で「減尽定」という三昧の境地がある。この定は「想受滅」とも言い、有部では想や受さえも滅して、無心の境地になることを言う。ここで、譬喩者や世親は、想と受は滅しても、心のみは滅しないとの立場をとったことが論証される。アーラヤ識を意識してのことである

うが、興味深いところである。

以前評者は、『俱舍論』においてこの大地法を定義するとき、世親が「伝説 (Kṛta)」の語を用いて、十大地法すべてが俱生する点に疑義を呈したのは、瑜伽行派の「遍行・別境」の心所の分類を意識してのことであると述べたことがある（拙稿「心理的諸概念の大乗アビダルマ的分析——遍行・別境心所——」中村瑞隆博士古稀記念論集『仏教学論集』一五五頁）が、本書では、それを更に詳しく、大地法に対する譬喩者・覺天・法救・シュリーラータ・世親・瑜伽行派からの批判を詳しく紹介し、検討している。この方法論は他の心所も同様であり、評者も大変参考になった。これらの論争から、俱生の意味を、譬喩者等は現象面から理解するのに対して、有部は各法的作用の強弱によって説明しているとしている。

ここで著者は、有部では心と大地法の関係をいう場合、「俱生」と「相應」の双方が区別せずに用いられる（六〇頁）としているが、「俱生」という語はアビダルマ教義学上重要な概念であり、ここでは単に「ともに生起する」というような広い意味で用いているのであるから、あえてここで「俱生」と「相應」を問題とする意図がよくわからない。

以下、大地法と同様な方法論で、大善地法、大不善地法、大煩惱地法、小煩惱地法が、『俱舍論』以前の有部諸論書や、『順正理論』『アビダルマデーバ』『阿毘達磨集論』などの対比において、詳しく検証される。

大善地法では、有部が無癡を除いて慧に含める件に関して、

諸論書の比較検討によって明らかにしている。その他の善心所に
関しても、『品類足論』や『増一阿含経』などのサンスクリ
ット断片を参照するなど、最新の学界の動向をふまえた論究は
評価すべきである。

大不善地法では、『婆沙論』で五項目であったものが、『俱舍
論』以降、「無慚・無愧」の二法にまとめられるいきさつなど
を詳細に検討している。

ところで、最後の不定地法であるが、『俱舍論』に、この不
定地法が「尋・伺・悪作・睡眠等」と説かれ、これが四法であ
るのか、「等」に他の心所が含まれるのかをめぐって、古来議
論のなされてきたところである。五位七十五法というときの七
十五法は、この不定地法を四と数えたときの法数である。ここ
で著者は、『俱舍論』の不定地法は、瑜伽行派の影響を受けて
成立したとする新説を『俱舍論』以前の有部論書にもこれら四
法をまとめて特例のあることを示して批判し、『婆沙論』の影
響を受けたとしている。さらに、「等」の解釈をめぐって、称
友、『アビダルマデーバ』、北伝の諸論書、南伝の諸経典、
『ウダーナヴァルガ』などの諸資料を駆使して、「等」には、
多数の染汚法が含まれるとしたヤショミトラ（称友）の見解
をとりたいと結んでいるのは説得力がある。

次の新しい一切法の影響（第三章）では、いきなり「四念
住」が出てくるのはいささか唐突である。後を読んでみると、
「法念住」の「法」に無為法までを当てることは、有部の新し
い法体系たる「五位」説の体系化と同根であるとの記述で、よ

うやく「四念住」と「一切法」の関係がわかる。本書の初出一
覧からみると、ここにこの論文を挿入した理由はわかるが、少
なくとも「四念住」が前の章とどう関わるのかをまず説明すべ
きであろう。そこで、一切法としての「名色」が問題とされ、
その後、「五位七十五法と五位百法」との問題が、心・心所法
に対する世親の立場として論じられる。ただ、論究の観点の違
いはあっても、既に論究された「第二章 心所法の種類」と重
複する箇所がかなり多くあり、結論もその繰り返しとなってい
るのは残念である。

これと同じことは、次の章に何故「俱舍論」以前の煩惱論
（第四章）を問題とするかを述べていないことにも関わってく
る。この章では、何故か、古くからヒンドゥー社会において、
人生の三大目的とされたダルマ（dharma）、アルタ（artha）、
カーマ（karma）が問題とされ、『カーマストトラ』、『マヌ法
典』、『ギーター』、『ウパニシャッド』などにおける「欲（カー
マ）」は、肯定的な意味、むしろ人生において不可欠のもので
あることが述べられる。それに対して、仏教では否定的態度で
望んだことが、原始仏教やアビダルマの用例を通じて紹介され
る。そして、この「カーマ」は、アビダルマの教義学上「貪
（raga）」との結びつきが深いとされる。ここで著者は、
“chandaḥ karukamaṭā”という『俱舍論』と『デーバ』の用
例をあげ、kāma は kamata という抽象概念になるとしている
が、kamata はコンパウンドの後半に付けられる語で、「いせ
んと欲する」という意味であり、kāma と同一次元で論じる言

業ではない。むしろ、大地法としての chanda (意欲) とこの kama との比較を詳しくここで検討して欲しかった。この後、『法蘊足論』の「雑事品」の性格が問題とされ、さらに、『俱舍論』以降、有部系諸論書に、随煩惱の名の下にこの「雑事品」の中のものあげられることを指摘する。さらに、『ラトナーヴァリー』もこの「雑事品」が典拠となり、『瑜伽論』との関連も検討される。すなわち、有部アピダルマではこの「雑事品」から「六随眠」を除外して、残ったものすべてを随煩惱としたとする。

この後、定義集として、『法蘊足論』『ディーパ』『ラトナーヴァリー』『瑜伽論』における随煩惱の定義が資料的に列挙され、我われ研究者にとって特に有益である。ここで、他の箇所でも言えることであるが、『ディーパ』『ラトナーヴァリー』の定義は原文のみで、その翻訳があげられていないのは残念である。これに続いて、個々の問題として、貪瞋癡と klesha の問題、随煩惱の定義についての諸論の特色と論究されるが、その特色をまとめた記述はない。

次に、『婆沙論』『結蘊』の蘊名を異訳などと検討し、有部が「随眠」重視の姿勢を傑出させていると結論する。さらに、『発智論』と『婆沙論』の煩惱体系を多方面から検討し、これから初期の論書で結 (samyojana) であったものが、『俱舍論』等後期論書に至って、随煩惱 (anusaya) として多用されることが明らかにされる。その後、『俱舍論』以前の『発智論』と『婆沙論』の煩惱体系が検討される。もちろん『婆沙論』は

『発智論』の註釈として、有部思想体系の百科辞典的位置をもつ論書であるが、『俱舍論』とも比較しつつ、煩惱の体系を明らかにしている。ただ、些細なことながら、『発智論』の引用に、シヤストリーによる還元梵文をあげているが、還元梵文を資料として用いることはいかがなものであろうか。評者はかつて、『阿毘達磨集論』のプラタンによる還元梵文について意見を述べたことがある(拙書評、仏教学セミナリー一八号・九二頁)。

ここで、両論における煩惱と随煩惱の用例が検討され、両論で「結 (samyojana)」として使用された語を『俱舍論』では「煩惱 (klesa)」の語に改変したことが述べられる。そして、『俱舍論』では『法蘊足論』の中から貪瞋癡などを除外した残りすべてを「随煩惱」としたけれども、『婆沙論』ではそれを含めなかったところに特徴があったとする。

『俱舍論』の煩惱論(第五章)では、本書の副題になっている重要な章であるにもかかわらず、あまり紙数をとっていない。まず、『俱舍論』における「煩惱」「随眠」「随煩惱」の三概念がどのように取りあげられていたかを、称友・安慧・滿増などの註釈を参照しながら論究する。ところで、肝心の「煩惱」と「随眠」の解釈について、有部・経部間の論争のあったことは、先行研究もあることであるし、さらなる掘り下げをして欲しかったように思う。その後、「随眠品」の品名、構成などが検討される。ここで、三世実有についての論究があるが、かつて学界であれほど論争された問題でもあるので、何らかの著者の意

見を記して欲しかった。このあと、原始仏教以来、断ちがたい煩惱として、「渴愛」と「貪」があるが、『俱舍論』において、「法体系」に明確に位置づけなかった理由が検討される。次に、

同じ煩惱を問題とする『アビダルマディーパ』第五章の特色が検討される。評者もかつて拙著『アビダルマ思想』で問題としたように、この論書は、有部アビダルマ史上、特異な存在である。著者は特に煩惱論を詳しく検討し、『ディーパ』はもはや有部の伝統にとられなかったのではないかという。そして、特に煩惱論においては、有部史上初めて、「煩惱」の語をあらゆる染汚法の総称であると明確に打ち出し、さらに特殊な用語例のあることを指摘しているのは注目される。

最後に著者は、煩惱論に直接関わらないが、重要な問題点のいくつかを付論（第六章）に位置づけている。『集異門足論』の著者に関する論究（結論は出ていない）、『入阿毘達磨論』の著者、『六足論』の成立地、『俱舍論』の祖型本としての『阿毘曇甘露味論』などについて、著者の学説を披瀝している。紙幅の都合で、すべての紹介はできないが、この中で、特に評者が興味を持った『入阿毘達磨論』の著者について一言しておきたい。従来この論書の著者は「塞建地羅」と音写され、唐言「悟入」とされてきた。著者は先行研究を参照しつつ、作者の原語は「Skandhita」であり、チベット訳などを参照して、「悟入」は論書名「Abhidharmavataṅga」の中の“avataṅga”の訳語であり、その論書名の一部が普光以来、誤って作者名とされるに至ったと結論する。このことについては、かつて学界でかなり論議さ

れ、評者もこの問題に触れたことがあったが（拙著『アビダルマ思想』七八頁）、著者の結論には説得力がある。

三

以上、本書の論述に従って、評者の興味の赴くままにその概要を紹介した。五〇〇頁を越える大著をわずかの紙数で紹介したため、遺漏のあることをおそれるが、本誌における書評の紙幅制限ということで容赦願いたい。又、原稿締め切り期限の都合で、本書を精読するところまでは至らなかったが、いずれの箇所にも、著者の地道な、しかもアビダルマに対する情熱というものがほとばしり出ている。内容からして、煩惱論に関する資料的価値も高いと言える。

ただ、本書は啓蒙書ではなく、学術書であるのに、索引がないのは実に残念である。和漢語・梵語索引はどうしても欲しいところであった。ついでに、いくつかの感想を言わせてもらおうと、論書で問題になっている事項を、著者の関心に従って、抜き出して紹介している面が強く、学界で問題になっている点について詳細な分析がやや不足であるように思う。それから、当然著者は『俱舍論』の梵本や諸註釈を読んでいるとは思いますが、表面上は漢訳資料が多く、称友・安慧・滿増の註釈は一部で見ることができないのは残念である。評者も、本書と同様にかつて拙著において過去に発表された論文を再編集して出版したという経験のあることであり、こんなことは言える資格はないかもしれないが、近年発表されてきた譬喩者・経量部につい

ての様々な研究報告（例えば、原田和宗、福田琢、本庄良文、Collet Cox、Robert Kritzer氏など）を参照して、本書に加えて欲しかった。

初めにも一言したが、本書には『アビダルマ教学』というタイトルが付いている。『俱舍論』の煩惱論を中心としながらも、そこにアビダルマ教学とは何か、そして、それが何を目指しているのかというところにもう一つ深い究明が欲しかったように思う。

近年、直接にアビダルマというタイトルを付けた書物の発刊

は少ない。また、最近の学会においても、アビダルマの部会は以前に比べて活気が見られないように思う。そのようなときに、ここに類書のないアビダルマにおける煩惱論に関する大著が発刊されたということは学界を大いに刺激してくれると思う。その意味で、インド学、原始仏教、アビダルマ仏教、インド大乘仏教などを専門とする読者諸氏に広く推奨するものである。

(二〇〇二年三月三十一日、法蔵館刊、A5判、

五〇八頁、定価二一、〇〇〇円)